

# 世紀央後の社会学について

——クリフォード・ギアツの事例——

福 永 安 祥

今日、社会学は、一方において、Grand Theory へのつよい郷愁をひそめながら、他方において、社会事実を主観的意味的なものとみて、ミクロ的・共時的・共観的・記述的傾向をつよめつつある。これらの社会学への要請は、ミクロ社会学の精緻化を通しての、構造的・巨視的な世界の分析を求めつつあるものと考えられるし、非常に具体的な状況の綿密な分析のなかで、個人の行為を通しての社会生活を究めようとするもので、生活誌、民俗誌、社会誌、民族誌の記述と分析とが重要な意義をもってくる。この社会学的アプローチは、従来からの実証的調査的社会学と背反するというよりも、実証的調査的社会学が計測可能でかつ操作の可能な経験的事実の把握を目的とするのに対置して、実証的な科学のアプローチによっては解き難い領域の存在すること、すなわち、社会生活の formal な側面（制度、集団、機構）だけでなく、informal な側面（社会意識、歴史的個性、日常生活）にも注意を向けるべきこと、あるいは、われわれの直面する社会事実は歴史や伝統に根ざす特定の意味をもつこと、それぞれの状況に応じて、個別的具体的な事実の特質について解釈し、説明することが必要であること、これらの諸点を主張するものと考えられる。

解釈的ないし説明的な社会学的アプローチの重要性が容認されるとき、クリフォード・ギアツ<sup>(1)</sup> (Clifford Geertz, 1926~) の解釈的理論が、われわれの学的関心をひいて登場するので

ある。ギアツは、マックス・ウェーバーの社会学の伝統を継承し、イスラーム圏の東と西—インドネシアとモロッコ—における Field Work による輝しい業績によって比較社会学的研究を確立し、さらに、現在は、意味論の立場においてその研究を進めており、人類学から、歴史学、政治学、国家論（劇場国家論）さらに社会学へと着実にその影響力を拡げていて、社会学と人類学の交流の焦点にあるものとみることができる。

## 1

世紀央社会学 (Midcentury sociology) は、1930年代からの機能主義、社会変動論における発展理論 (developmentalism)、ミクロレベルでは、社会行動主義や、シンボリック相互作用論がすでにその位置を確立していた。第2次大戦終結後、国際社会における米国の圧倒的優位は、学問の世界においてもほぼ同様であって、1940年代から50年代にかけて、社会学も教育社会学も、構造機能主義が、正統派的な理論とされ、社会学の理論的指針を示すものとされた。パーソンズ、シルズ、マートン、ラザースフェルドらのすぐれた社会学者の積極的な活動もあって、これらの学説は、1950年代を通じて、米国の社会学界だけでなく、ドイツ、北欧諸国、日本にもその影響力を拡大していた。

しかし、1960年代に入ると、欧米諸国の社会学界は、構造=機能主義をめぐるの論争を展

開するに至った。これは、(1)構造＝機能主義が、米国の大衆社会の状況を背景とするイデオロギー性をもつこと、(2)社会諸科学の諸分野に、反実験主義の傾向の盛り上がりのみられること、厳密な統計的・数理的社会学の限界や社会行動主義に対する反発がつよまったこと、(3)科学に対する観念そのものが変容を要請されてきたこと、科学社会学の勃興、トマス・クーンの科学論の影響など、さらに、(4)学界におけるマルクス主義、現象学、相互作用論などの復活など、これらの諸要因によるものと考えられる。

社会学界の変容は、米国の大衆社会における価値観の多様化、大学紛争とラジカル社会学の主張などや、60年代の世界的規模にわたる政治的社会的激動——インドネシアの9・30事件、中国のプロレタリア文化大革命、ベトナム戦争、第4中東戦争と石油危機——とが、共振現象を引起したものと考えられるが、基本的には、「社会学理論の多元化」(a pluralism of sociological theory) [J. C. McKinney and E. A. Tiryakian, 1970: p. 1~2] の進行として考察すべきものである。

1970年に刊行された『理論社会学』は、J. C. マッキンニーと E. A. ティリヤキアン<sup>(1)</sup>の編修になる18編の論文集であるが、1968年1月のDuke大学における理論社会学のシンポジウムに由来するものである。この論文集は、社会学の多元化的傾向へアプローチしようとするもので、社会現象が非常に複雑性をもつが故に、社会学は非常に多様なアプローチを含む高度に多元的な研究活動であることを確認する立場で、編修されている。異なった社会学的問題は、異なった展望や理論形成を求めることになり、多様なレベルの社会学理論の諸分野が現出することになる。18編の論文執筆者には、T. パーソنز、M. レヴィ、E. A. ティリヤキアン、T. B. ボットモア、R. A. ニスベット、P. F. ラザースフェ

ルド、H. ガーフィンケルらの米国社会学のそれぞれの分野を代表する人々の名がみられる。<sup>(2)</sup>

ランドール・コリンズ [Randall Collins, 1981: p. 1~2] によると、世紀央後の社会学 (Post-midcentury sociology) は、一般的にみて、歴史的マクロ的比較社会学の黄金時代 [a golden age for historical and macrocomparative sociology generally] であるという。このアプローチには、マルクス主義的傾向、ウェーバー的傾向あるいは折衷主義的傾向 (構造社会学 Structural Sociology など) が含まれよう。R. ブードン [R. Boudon, 1980: p. 39] も、マクロ社会学の主要なパラダイムとして、機能主義、新マルクス主義 Neo-Marxism、相互作用分析の3者をあげている。世紀央後のマルクス主義は、哲学的・ヒューマニスティックな傾向を著しく強いものとしている。同時に、思索的な批判的なミクロ社会学が台頭してきて、現象学の影響の拡大とともに、エスノメソドロジー、認識社会学、認知社会学、解釈社会学など様々な理論的研究の分野が発展しつつある。ミクロ社会学は、哲学的な思索的な理論化と、新しい研究技術とが結びついて、かつてなかったほどの精密さと理論的に深い水準に到達しつつあるものとみられている。

認知の社会学 Sociology of perception は、M. ダグラスの1970年と1978年の2冊の著書と1982年に彼女の編修した「認知の社会学論集」を中心に展開をはじめている。ものごとが認識されるふり分けの過程は、大いに文化的なものの Cultural であって、認知にもとづく文化的束縛を組織化することをめざして、人類学に由来する研究方法—グリッドとグループ分析—を採用する。「論集」は、13人の寄稿者が、M. ダグラスの発議した研究方法をそれぞれの異なった領域に応用することで、その研究方法のもつ可能性を検討しようとする。M. ダグラスの理

論は、4つの欄のマトリックスとして呈示されて、歴史の比較研究や個々の歴史的事例の研究に向けられる。

1970年代は、社会学の多元化・複数化の進展とともに、外部世界の激変が、再び社会学と思想の世界に大きな衝撃を与えて、社会学それ自身の可能性が問われることになる。1975年のベトナム戦争の終結とその後におけるインドシナ情勢の急展開——1979年の中越戦争、ベトナム軍のカンボジア侵攻、ポルポト政権の極権政治ベトナム及びラオスにおけるソ連の影響力の拡大——、さらに、1976年以降における毛沢東の思想と政治の解体化——「一般にウェーバーの影響をうけた研究者には、こうした革命における預言者のカリスマの意義を、必要以上に強調する傾向がある」という指摘、今日、文化大革命は「民族の大災害」であり、毛沢東に対する「建国に功あり、治国に過ちあり、文革に罪あり」という評価が定着してきていること——これらに対して、日本の社会学、社会科学は如何に対処するのか、自らの隣国の社会的現実に対する深い洞察力を欠如していることがゆるされることかどうか。

さらに、アングロサクソン系を主軸とする自由主義経済の跛行性、経済活動の極大化がもたらす人間と環境への破壊とがある。一方において、「社会主義経済の悲劇」が問題とされ、<sup>(6)</sup>「現代社会主義のジレンマ」は、「ソ欧・東欧の経済システムが完全に行き詰っており、大胆な経済改革を導入するしか現状からの出口はない」との見解が、肯定的に表明されるなど、社会主義の世界にも問題は山積している。世紀末に向って、自由主義経済も社会主義も、大きな障壁に直面していて、新しい進路を開削するについて、社会学は自らを変容するとともに、歴史社会学とマクロ的な比較社会学の新たな展開を期待せざるをえない。人間社会についての巨

視的考察は、社会学の最も本質的な部分に属するからである。

アンソニー・ギデンズ〔A. Giddens, 1982: p. 1～11〕は、「過去10年以上にわたって、社会学の内部に、さらに広く社会諸科学においても、重要な変化がおこった」ことを指摘し、その新しい書物の執筆に当って、(1)長い間にわたって、社会学の伝統的な知識であった知的な領域を批判すること、(2)社会学は、本来的に社会批判と結びつくべきものであること、これらの2つの立場において、「批判的序説」(Critical introduction)と自らがよぶ小冊子をまとめている。さらに、彼は、歴史的観点をとりあげてことを強調して、「社会学と歴史」とは、通常相異なった研究分野と考えられてきたが、これは全く誤りであることを主張する。そして、イギリスという「一つの特定の社会」(one particular society)に関して、社会学の多くの問題の説明がなされている。自らの居住する自国の社会学的分析は、当然、社会学者に要請されるところであって自明のことといわなければならないが、イギリスの社会についての彼の社会学が、すべて、日本の社会の解明に妥当するとはいえない。この自明なことが、必ずしも自明でないところに、日本の社会学界の問題の深刻さがあるといえよう。

「西欧の碩学の所論は随処に引用されるが、その所論を成立させたその時代の、その社会と政治との連関、そしてそれらと日本のそれとの比較において、どのような異同があるかについては、著者はほとんど触れることを避けている<sup>(7)</sup>」という、日本の政治学者に対する一評論家の提言を想起しなければならない。

ギデンズは、社会学を、先進社会または産業化社会の諸制度の研究、これらの諸制度の変容、転換の研究にその主要な焦点を向けるものと定義する。かれの社会学は、「開明性・批判

性・歴史性”に立つ社会学であって、階級、現代国家、都市、家族、産業化社会及び資本主義などの諸問題が主なテーマとして問題の解明が進められている。

ミクロ社会学については、米国の伝来的な小集団研究とともに、現象学的社会学の影響がその外延を拡大しつつあるが、社会学に新風をもたらすことになるのかどうか、多くの疑問点を見出さざるをえない。日本の現象学者木田元によると、現象学的社会学は、「(1)現象学と社会学との結びつきにどれほどの必然性があるのか、(2)「現象学的」という規定を冠しながらなぜそれほどにも多様な立場が生じうるのか、ということが問い直されることになるだろう」という。かれによると、現象学的社会学は、「結局は社会学をふたたび心理学にひきもどし」、「社会的現象がたしかに一面においてもっている、個々の主観にはいかんともしがたい物に似た情性を無視すること」になるであろうし、現象学的社会学がこの段階にとどまるなら、「間主観性という概念をどれほどふりまわそうと、古風な主観主義社会哲学におわるしかない<sup>(6)</sup>」という。現象学的社会学が、この現象学者の評定に如何に答えるか、今後に残された大きな課題となるであろう。

1970年代とその後におけるさらなる変容は、80年代より90年代をめざして、社会学に深刻かつ徹底的な示唆を与えていくものと思料される。それは、まず、第一に、グローバルな視点の確立と人類世界の多様性の認識——移民・難民・流民、少数民族と複合社会、民族国家と超巨大国家——、第二に、ヨーロッパ中心主義的思考様式からの転換——「東は東、西は西」であることの再確認——、近代化と植民地主義、“欧米諸国の社会学だけが社会学ではない”、ヨーロッパ流の社会学で、アジアの社会と文化

を説明することが可能かどうか、M. ウェーバーのカリスマ論とC. ギャーツの劇場国家論、内外の東南アジア研究者の間から、M. ウェーバー理論の限界がきつよく指摘されはじめてい<sup>(8)</sup>る。第三に、第三世界の社会学の台頭——“非産業化社会の社会学”の建設の要請、南北問題の社会学、貧困と反抗と自発性の社会学、自国の伝統に即した現代化の模索、社会建設の自立性と国際性——発展途上国の真の建設に寄与しうる社会理論とは何か、彼らは先進国とは異なった自国の課題をになっている。1982年3月、筆者は、日中社会学会の一員として、北京市の中国社会科学院社会学研究所を訪問した際、中国社会学の当面する研究課題として、(1)人口問題、(2)家庭と婚姻問題、(8)少数民族問題、これら3者がとりあげられていることが述べられた。人口問題は、1982年7月1日の第3回国勢調査により10億人の人口が確認されているが、2億人の過剰人口のあること、かつて、中国は人口問題について1つの誤りをおかしたこと、きびしい人口抑制政策（1人っ子政策）が実施されていること、農業と工業の現代化についても、人口の都市集中は出来ないから、人口問題に関連して、大都市・中都市・小都市の都市の構造がいかにあるべきかを研究すること。家庭と婚姻の問題では、「東洋の家族の構造と西洋のそれとは異なる」から、現代化をいそぐなかで、如何に伝統をうけつぎながらよい家庭をくみ立てていくかを研究する。これは、中国人が数千年の歴史のなかでもってきた家族観念の大転換（「多子多福」から1人っ子政策へ）を求めるもので、その成否は社会生活の現代化の根本課題であるが、必ずしも楽観は許されない。

さらに、社会学研究所の研究方針として、(1)中国は社会主義の国であるから、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を大切な思想として研究を進める、(2)これらの思想によりながら、中

国の事情と結びつけて、中国独特の社会学を建設したい、(3)マルクス主義を以って、社会学にとりかわることができるとは考えない、(4)従来の研究成果を否定したり、排斥することをしない、(5)マルクス主義の立場にあるものは、すべての研究成果をいかすことを方針としている、(6)マルクス・エンゲルスも科学方面の成果を重視している、(7)最近の3年間、各国の社会学者との交流に努めている、日本の社会学者が中国に来て、授業をしてくれることを考えている、との説明がなされていた。

また、上海特別市が設置している上海社会科学院には、1980年に社会学研究所が付置されている。中国社会科学院社会学研究所が、社会学の研究方針や全国的な人員や施設の配置を問題としているのに対して、当院は、上海市の当面する具体的な社会問題の研究に重点がおかれているように思われた。現在、この研究所は、研究員26人、特約研究員12人、4つの研究グループがつくられて、(1)社会学理論…6人、(2)婚姻と家庭…4人、(3)労働…5人、(4)社会工作（社会事業と社会福祉）…5人、が組織されており、労働グループは、とくに「待業青年」（失業青年）問題を扱っている。上海特別市では、失業青年問題が重要な問題となっていて、その研究と処理は重要な課題であるが、実務は上海市の各区におかれている「街道弁事処」（区役所の出張所的な組織）が、その処理に当たっている。

中国の社会学は、1952年に研究が停止されて、30年後、1979年3月15～18日に北京で「社会学座談会」が開かれ、「中国社会学研究会」が成立し、会長には著名な人類学者費孝通氏が就任された。中国の社会学は、30年間の空白のために、人材の欠乏と人員の配置に大きな困難があるが、上海市の复旦大学分校の社会学系がまず正規の学生の教育をはじめ、北京大学、天津の南開大学、広東の中山大学などで社会学の

授業が始まりつつある。<sup>(10)</sup>

第四に、それぞれの社会の基幹集団とそこに形成される人間類型を明らかにし、さらにその社会の階層構造の究明に焦点が志向されるべきである。そして、これらを通して、各々の社会の社会生活の比較研究を追求して、現代アジアの主要地域の巨視的な比較社会学的研究が樹立されるべきものと考えられる。

基幹集団についての古典的研究には、「人間」研究（Nuer, Tikopia, Torobriand, Navajo）、「地域社会」研究（Chan Kom, Amazon Town, Ramah, Lesu, Sue-Mura）などの人類学の成果があるが、血縁集団や地域集団とともに、基礎的な機能集団（学校、企業、組合、政治結社などアソシエーションの社会学）のより深い研究を要請されよう。日本の学校や企業体のもつ構造的特質を明らかにすることなしに、日本の社会の特性を究明することは困難となろう。稲作社会という側面のみをとり上げて、日本農村の社会的規定性の重みを問題とすることは、必ずしも妥当といえないが、しかし、ジャワの稲作社会に、ゴトン・ロヨンという協同作業や、ムシャワラとよばれる全会一致方式が長く定着してきたことをみると、稲作社会のもつ固有性の比較研究も意義あるものと考えられる。

世紀央後の社会学は、「社会学理論の多元化」とともに、歴史社会学とマクロ的比較社会学に一つの焦点が結ばれつつあるものとみて、その焦点への接近として、C. ギアツの研究の全貌と研究上の視点を明らかにしたいと思う。

## 2

クリフォード・ギアツの研究史を辿ってみると、いくつかの発展の経過がみられるし、また、当然のこととして、米国の社会学界・人類学界の動向がかれにも大きな示唆と影響を与えたものと思われる。

かれの研究は、第1に、特定文化（ジャワ、バリ、モロッコ）の民族誌の記述にはじまる。1950年代のインドネシア研究に基づく3部作、「ジャワの宗教」（1960）、「農業インヴォリューション」（1963）、「インドネシアのある町の社会史」（1965）がまずあげられる。インドネシア研究は、マサチューセッツ工科大学の国際関係研究センターの支援の下で、かれの妻を含む6人の研究チームの共同研究として進められたもので、研究チームのメンバーはそれぞれの研究テーマによる記述的なモノグラフを発表している。調査対象の仮名の町 Modjokuto は、中東部ジャワの省都スラバヤから自動車で半日の行程のところにある、人口約2万人（1,800人の華僑と若干のインド人、アラブ人を含む）の田舎町で、周辺18か村の商業、教育及び行政の中心地である。調査研究は、(1)ハーバード大学におけるインドネシア語研究（1951年9月～52年7月）、(2)オランダ・ライデン大学と熱帯研究所における基礎研究（52年7月～10月）、ジョクジャカルタ（Gadjah Mada 大学）におけるジャワ語研究（52年10月～53年5月）、(4)現地モジョクトにおける調査活動（53年5月～54年9月）、(5)報告書の作製（54年10月～55年8月）の順序で実施されて、ギアツのレポートは1956年春、ハーバード大学に学位論文として提出されている。

モジョクトには5つの主要な職業—農民、小売商人・独立の職人・労働者、及び事務職員、学校教師、行政官吏—to ジャワ人たちは従事している。また、宗教信仰、道德上の優先活動及び政治的イデオロギーによって、ジャワ文化の道德組織を反映する3つの宗教的な人間類型が区分される。宗教活動をめぐる3つの人間類型を設定し、それは、ジャワの主要な社会構造上の3つの核心、村落、市場及び政府官僚に対応するものであるが、M. ウェーバーの宗教社会

学に対する自己の宗教社会学—ヨーロッパとアジア、プロテスタンティズムとイスラーム—を確立したところにギアツのジャワ宗教研究の寄与がある。ギアツのウェーバー理解は、その師 T. パーソンズを経由するものではあるが、マックス・ウェーバーの「天才」(genius)が、彼等の仕事を可能にしたと高い景仰の念を示しており、「マックス・ウェーバーが死んでからすでに50年をすぎても、社会学は依然として計画書の段階に留まったままである。しかし、その計画書たるや正しく実行してみるに値するものだ」〔C. Geertz, 1968: p. xii〕と述べている。

(1) Abangan. アバンガン、ジャカルタ地方の地方語とジャワ語。Abang は、“赤い”という意味、転じて、“白い”帽子のイスラーム教徒 Haji に対して“信教をおろそかにするもの”をさして用いられる。アバンガンは、ジャワ農民の信仰態度を表明するものであって、農民のもつ信仰体系は、アニミズムの世界、4世紀以来のヒンドゥー教の残存する影響力さらに15世紀以来のイスラームの信仰が、バランスよく統合した混合信仰となっている。ジャワの農村は古い歴史をもち、最初のマラヨーポリネシア系住民はすでに農業の知識をもっていたといわれる。稲作は、恐らく1～2世紀に既に伝えられたものと見られており、東北の進路をとって日本に、南東のコースをとってジャワ島にまで及んだものと考えられる。アバンガンの信仰上の伝統は、スラマタン (slametan—ジャワ語) という聖食が供される儀式的な式典 (供食儀礼) が中心で—葬式の場合など親族、友人、近隣者に馳走を振舞って死者の吉祥を祈願するもので、通過儀礼、農耕儀礼その他の機会にも行われる—、このスラマタン (共同飲食) は、インドネシア (とくに、ジャワとバリ) を特徴づける重要な生活慣行であり、また、「集団結合

の強さの結果としてではなくむしろ人間関係を不安定なため、たえずその不安定な人間関係を固め直し補強せざるを得ない」〔アジア・エートス研究会編、1978: p. 81〕ために行われるものとみられている。

(2) Santri サントリ。信心深い人、イスラムの原理を厳格に信奉する人、サントリは、メッカへの巡礼、イスラーム教徒の寄宿学校、町の市場組織が担い手となる。とくに、商人階級は、より広い世界に対するルートとして、メッカ巡礼への依存度を強めながら、ジャワ人伝来の信仰体系との妥協とともに、中東のイスラームほどに教条的でなく、南アジアの宗教のように靈妙でもない一つの宗教体系をつくり上げたのである。また、農村にも強いサントリ的要素は見られる。

(3) Prijaji プリヤイ〔新綴字法・Priyayi=priayi, 貴族、高官を意味するジャワ語〕。ヒンドゥー・仏教的要素をもっとも強く抱いている上流階級、ヒンドゥー教に基づく宗教的身分を失ってはいるが、ヒンドゥー的な汎神論を堅持している。高度にヒンドゥー化していた各地の支配層、上流階級は、地方のオランダの政策を実施する官僚組織の一員に転落していた。

ジャワは、世界で最も稠密な人口地帯、高度な芸術、集約的な農業をもつ文明地域であるが、住民の90%以上がイスラーム教徒であるという公式的表現の背後にある、複雑な、深い精神生活の実態を、アバンガン、サントリ、プリヤイの3つの社会層に見出そうとする。これらの人間類型は、理念型としてあるものであるから、現実的には、それらの人間類型が重層化、相互に深い関連をもつ側面を重視しなければならない。

「農業インヴォリューション」論は、Hans-Dieter Evers が、その「東南アジア社会学論集」(1980)の中で、東南アジアの社会学的研究のう

ちで代表的なものの1つとしてとり上げたものである。「インドネシアにおけるエコロジカル変化の諸過程」というサブタイトルをもったこの論文は、シカゴ大学の新国家比較研究委員会(The Committee for the Comparative Study of New Nations of the University of Chicago)の下で執筆されたもので、ブーケの二重社会論を含めて、ジャワ農民の停滞化傾向を説明するものであるが、今日、必ずしも、その論議が肯定されているとはいえない。 “インヴォリューション” Involution という概念は、米国の人類学者 A. ゴールデンワイザー (1936) に由来するもので、本来、「ある限定した様式と思われるものに到達後も、新しい様式に自らを安定することも推移することにも失敗して、内的により複雑化することによって発展を続ける状態」と解されている。evolution に対して involution で、退化、退縮、内向化、自らの失敗過程と訳されよう。インドネシアのなかで、ジャワと外島(外領)とは、輸出農業については後者が優位にあって、インドネシア人とオランダ人との経営上の相違を明確に示していた。ジャワ島では、中・東部は水田耕作(Sawah)で、西部は焼畑耕作(Swidden)であって、水田耕地地帯では、農村内部で、水利、土地所有と土地所有関係、協同作業はより錯雑化し、複雑化して、退縮化の過程をたどっている。

バリについては、ジャワとバリの経済近代化の形態を比較した「行商人と貴族」(1963)、さらに、劇場国家論の主張で有名な「ネガラー19世紀バリの劇場国家」(1980)などの著作がある。

ギーアツのモロッコ研究は、1964年、さらに1965年から71年にかけて、モロッコの内陸部にある古い城壁に囲まれた小さな町 Sefrou の調査研究に向けられた。Sefrou は、アトラス山系に近い9世紀に建設された古い町で、1960年



のセンサスによると、人口20,961人、イスラーム教徒が83.9% (17,583人)、ユダヤ人14.5% (3,041人)、フランス人、アルジェリア人その他の外国人となっている。1979年に調査のモノグラフ「モロッコ社会の意味と秩序」が刊行されたが、ギアツ夫妻と L. ローゼンによる、510頁の大判の報告書で、社会組織へのアプローチ (K. ローゼン)、バザールの経済 (C. ギアツ)、Sefrou の住民 (P. ハイマン)、家族結合の意味 (H. ギアツ) の4編からなっている。

ギアツの第2の研究分野は、Field work の成果に基づく比較研究の確立である。これは、マックス・ウェーバーに触発されて、インドネシア (ジャワとバリ) と、モロッコの調査研究に向けた究極の目標であったといえよう。まず、1968年の「イスラーム観察記」[C. Geertz, 1968] は、「モロッコとインドネシアにおける宗教的發展」という副題がそのまま、この本の性格を示している。かれは、まず、宗教の比較分析を進めるための基本構想を示し、ついで、単一の宗教と看做されているイスラームが、インドネシアとモロッコという全く対照的な文化をもつ2つの国で、どのように発展したのかをたどる研究にその基本構想を適用したものである。

宗教の比較研究は、(1)宗教の変化は測定することができず、宗教生活の変化を示す指標 (indices) はいまだ確立されていないこと、(2)宗教的経験の変化が形づくられる場合、どのような種類の事物に注目すべきかが明らかになっていないこと、そして、(3)いかなる条件の下でいかなる信条と儀礼とが、いかなる種類の信仰を支えているかを明らかにすること、(4)ある宗教的な態度の持続に密接に関連している社会的な装置 (social apparatus) の種類を区分すること、(5)信仰を現実に維持しているものは、象

徴的な様式と社会的な配置 (symbolic forms and social arrangement) であること、(6)常に具体的な事例、特殊なもの、ミクロ的なものに注意を向けること、一般論に依拠しては間違ってしまうようなことを、小さな対象のなかに見つけ出すことが出来ること。

イスラーム教圏にあって、インドネシアとモロッコは、その東端と西端とに位置していて、宗教上の同義性ととともに、文化の諸側面において全く異った様相——スマトラのインド洋岸のパダン高原の Minangkabau 族は、母系制というかれらの部族社会の伝統をきびしく維持しながら、父系的なイスラーム信仰をきびしくうけいれている——を示している。両国民がそれぞれメッカに向って礼拝するとき、インドネシア人は西に向って、モロッコ人は東に向って、礼拝するのである。インドネシア人とモロッコ人は、それぞれ逆の方向を向いて礼拝しているわけである。

モロッコは、7世紀にイスラームと接触しており、モロッコが民族を形成したのと、イスラームを民族の信条としてうけいれていったのは、西暦1050年から1450年にかけてのことである。時の経過とともに、城壁に囲まれた大都市に集まった職人、貴族、学者、小商人らは、通商と技能を基礎に定住社会を發展させ、地方に散在する農民、遊牧者は牧畜と農耕による移動社会を發展させていった。モロッコの宗教的中心は都市や農村ではなくて部族の世界にあった。ここでは、イスラームが単一の宗教文化の世界を構築してきた。

インドネシアは、これと対照的に西暦紀元以来、農民の社会であり、ジャワ島では水田耕作が経済的基礎をなしていた。当初、インドネシアには、仏教とヒンドゥー教の文化が移植されて、イスラームがこの土地に到着したのは13世紀以降のことである。ヒンドゥー＝仏教文化の



混合文化の上にイスラームが受容されてきたのであり、しかも、農民の世界に多分にみられるようなアニミズム的要素が残存していて、インドネシアでは、イスラームは単一の文化を構築するには至らず、その一分枝となったのである。

モロッコにおいては、イスラームは、文化の同質化を促し、道徳的感情の一致をはぐくみ、根本的信条と価値観の社会的標準化をもたらす力となりえたのであるが、インドネシアにおけるイスラームは、混合信仰の傾向をもって、著しく柔軟で、多義的な教義を示してきている。

「モロッコとインドネシアは、具体的な歴史の経過が全然違っていて、結果において、宗教的發展の結末も対照的な相違をみせている」のである。イスラームの教義に忠実であろうとする原理主義と、それを具体的な活動のなかに展開しようとする実践主義との相剋が、両国におけるイスラームの受容とその発展経過の相違をなしてきたものと考えられる。

ギアツの第3の研究分野は、文化論に関するものである。1973年に刊行されたかれの論文集「文化の解釈」〔C. Geertz, 1973〕は、既述の諸論文を集成したものであるが、とくに、新たに書き下しの第1章「綿密な敘述—文化の解釈的理論に向けて」は、かれの文化論の一応の大成を示したものであるとして、内外の高い評価をうけている。

ギアツの初期の学問的関心は、機能主義 functionalism に向けられていたが、現在は漸時それへの関心は減退していった、意味論 semiotics に対する関心がより多くなってきているという。第1章の「綿密な敘述」thick description ということばは、ギルバート・ライルの観念を借用したもので、綿密に敘述するということは、人類学あるいは社会人類学の研究者が作り上げる民族誌 ethnography のあ

り方について述べたものである。民族誌をつくる目的は、重層的な意味の構造を発見することであり、民族誌を分析するということは、意味の構造 structure of significance をえりわけること〔C. Geertz, 1973: p. 7~9〕である。ギアツによると、意味の体系 “systems of significance” は、言語、慣行、芸能、技術に体现されている文化的な構成要素〔C. Geertz, 1968: p. 19〕であり、——すなわち、シンボル symbol である。社会生活における意味の体系は、シンボルの体系と結びついている。S. ランガーから借用した定義によると、“シンボル”は、「いかなる物体、行為、出来事、質、ないし関係でも、ある概念の運び手 (vehicle) となるもの」であり、「その概念がそのシンボルの『意味』である」という。

意味とシンボルの関係において、ギアツは、新しい“文化”の概念を提唱する。かれは、E. B. タイラーの“Complex whole”という文化概念は、あまりにも多くのものを含みすぎていて、かつ、漠然すぎるとし、C. クラックホーン〔Clyde Kluckhohn, Mirror for Man, 1949〕の文化概念も混乱しているとして、より徹底した文化概念を考える。ギアツによると、かれの擁護する文化の概念とは、「本質的に意味論的なものである。マックス・ウェーバーと同じく、私は、人間は、自らが紡ぎ出した意味の網の目 (webs of significance) に支えられた動物であると信じており、文化とはそのような網の目である」と考える。したがって、「その分析は法則性を求める実験科学ではなく、意味を求める解釈科学である」と考えている。ギアツが追い求めているのは解明 (explication) することであって、表面的には認めがたい社会的表現を読みとることである。〔C. Geertz, 1973: p. 5〕

文化というものは、“公的” (public) なもので

あり，“観念的” (ideational) なものであり，“非物質的” (unphysical) なもの，“様式化された行為” (patterned conduct) であり，“心の枠組” (frame of mind) である。かくて、文化は、「自己充足的な“超有機的” super-organic な存在」〔C. Geertz, 1973: p. 11〕であり、それ自身の力と目的とをもつものである。W. グッドイナフも、「文化は、人間の心と感情の中に存在する」と述べている。

エスノサイエンス、成分分析、認識人類学においては、「文化は、それによって個人があるいは個々のグループが自らの行動を導く心理的構造から成り立っている」ものと解されている。ギアツは、W. グッドイナフを引用して、「社会の文化は、その成員たちが幾分か容認できるように作動するために、知っているもの、信じているものからなっている」という彼の定義を述べている。彼の文化の概念は、きわめて、観念的なものであるが、これは、そこに意味をさぐり出すこと、意味をもつことと結びついているものである。

ギアツの第4の研究分野は、国家論に関するものである。とくに、19世紀のバリ島の小王領の国家像を扱った1980年の「ヌガラ」〔C. Geertz, Negara - The theatre state in Nineteenth - Century BaLi, 1980〕は、新しい国家論の展開として学界の注目を集めつつある。「ヌガラ」は、サンスタリット語に由来する“町”を意味することばで、宮殿、首都、国、国家の意味に用いられている。バリ島は、ジャワ島の東、1,350平方マイルの土地に、210万人の住民が生活している。この島に、オランダ軍の現われたのは、1906年のことであるから、19世紀のバリ島は、オランダの直接統治とは無関係に、伝統的なヒンドゥー教の世界を維持しつづけていた。

ヌガラは、宮殿、首都、国、国家などの多面的な側面をもつが、絶対的な専制君主の下で“単一の中心をもった組織国家” “single-centered apparatus state” であり、外来の思想なり観念なりの演出表現に従事することを主とする国家、したがって、外来思想の演出表現にふさわしいように政治秩序が形成されている国家のことと解される。劇場国家のドラマは、それ自体模倣的なものであり、外来思想や観念が中心となる。ヌガラは、一つの劇場として、それらを上演する組織となっていく。王も、僧侶も、役者も、農民もが、劇場国家の一員としての外来の思想や観念——バリ島の場合、ヒンドゥー教——の上演に協力しあうこととなる。自律的な自主的な国家に対して、自己の思想や観念の国家像がそこに浮彫にされていく。ヨーロッパ的な国家の国家像に対する、東南アジアの小領域国家の国家像として、多くの問題点をはらむ新しい国家論である。

### 3

ギアツの研究史を一貫して流れている研究方法、方法論、その研究の特性について、全貌を検討していきたいと思う。尤も、かれはなお現役の研究者として、きわめて多産的な業績をつみ上げながらその活動を展開しているわけであって、今後のいつその発展が期待されるところである。

1. Field Work かれの研究は、Field work の十分な蓄積の上に展開されているのであって、人類学者として当然のこととはいえ、堅固な研究作業の場を背景とする発想には、十分な現地体験をもつもののみがもつ学問的な強さがある。Field work の一貫した重視は、ギアツの最も基本的な研究方針をなすものといえよう。「人類学者の仕事というものは、表向きはどのような主題であったとしても、かれの調査

経験の表明にほかならないという傾向」を免れることはできないのであって、人類学者の業績は、調査経験がその人に何をもたらしたかを表明するものといわれる。Field work は、「(1) 思想形成を促すものであり、(2) 仮説の源泉であり、(3) 社会的・文化的な解釈の全範囲の源泉である」〔C. Geertz, 1968. : p. x.〕、ギアツの Field work は、つねに人類学者たる妻の Hildred と共同作業をなしており、ギアツ夫妻と若干名の参加者をえた調査研究チームが結成されているところに、かれの Field work の大きな特質が見られる。今日の社会学は、そのすべての研究領域においては、Field work と結びつかないものとなりつつあるが、社会生活の諸事実に学び、思想を鍛錬する場として、Field work は尊重されるべきものと思う。

2. 限定された狭小な地域 ギアツの Field work は、いずれも、限定された狭小な地域社会において進められている。インドネシアのジャワ島の中西部の Modjokuto の町、バリ島、モロッコの Sefrou という古い町など、狭い境界のなかの農村や田舎町である。限られた狭い地域の Field work を通して、(1) 限られた狭い地域の知識のうちで何が一般的で適用範囲の大きな解釈を導き出すことができるのか、(2) 限られた狭い地域の知識のうちで何が全体社会の把握に貢献することが出来るのかを、明らかにすることを求めるものであって、限られた狭い地域の知識の収集のみを目的とするものではない。ギアツによれば、ジョーンズビルの町で米国を代表させたり、ユカタン半島にメキシコ全体を求めるというような試みを、人類学者は行うものではないのである。したがって、Field work の対象地の選定は、研究成果を左右することになって、研究活動そのものに大きな意味をもって来る。

3. 個別研究 ギアツの研究は、個別研

究、事例研究を通しての全体把握をめざすもので、個体のなかに全体性を見出す努力が試みられる。尤も、ギアツの場合、調査研究における個別事例は、きわめて多岐で広範囲にわたっている。個別研究を媒介とする全体把握は、事例研究法のめざすところであり、もっともすぐれた社会学的方法といえよう。その際、観察されるべき対象は、意味・思考・概念を運ぶシンボル——特定社会の中での具体的なシンボルの構成、その意味の理解のされ方、その使われ方——である。ギアツによると、意味を運ぶものはすべてシンボルであり、一方意味はすべてシンボルによって運ばれるものとされている。宗教、イデオロギー、科学、法律、倫理、道德、芸術、日常生活などのシンボルの諸側面を見つめていくこと、彼の場合でいえば、羊泥棒、斗鶏、宴会（スラムタン）、パザールといった民族誌的な個別事例のなかに、その意味をさぐり出そうとしている。

4. 解釈理論 ギアツがその文化の定義において示したように、かれのめざす分析は、「法則性を求める実験科学」ではなくて、「意味を求める解釈科学」である。民族誌的デテールを追うことで、社会生活の解明を求めようとするのである。したがって、かれの理論は、記述的理論であり、解釈理論なのである。法則性を求めないという点で、ギアツは、近代の社会科学のもつ法則科学的性格を自ら否定するものであり、また、モデルによる構造主義に対しても反動的立場を示す所似でもある。

ギアツの解釈的人类学は、民族誌の綿密な叙述と分析による社会生活の意味の探究にその重点があることをみてきたが、一方において、かれの示す理論が体系的に組織づけられていないこと、かれの学問的関心の幅の広さとともにまとまりのないこと——散漫な傾向をもつこと——さらに、イスラーム圏——インドネシアと

モロッコ——という特異な対象地域のもつ境界性——その民族誌的叙述と理論の説明がどのように学界にうけられるのかという問題——、それらが、米国さらに日本の学界——イスラーム圏研究において著しく後進的であること——にどのように受容されていくか、今後に残された大きな課題といえよう。

# 註

- (1) クリフォード・ギアツ 1926年生れ、米国のプリンストンの高等科学研究所教授。1956年にハーバード大学の社会関係学部で、学位を得た。マサチューセッツ工科大学、カリフォルニア大学、シカゴ大学の教授を歴任している。
- (2) 各章のテーマを示すと、(1)社会学における一般理論 T. パーソンス、(2)マクロ社会学 A. エチオーニ、(3)比較分析 M. レヴィ、(4)構造社会学 E. A. ティリヤキアン、(5)社会学理論と社会的コンフリクト研究 T. B. ボットモア、(6)因果的連鎖関係のシステム W. E. モーア、(7)発展理論 R. A. ニスベット、(8)未来社会像 W. ベルと J. A. マウ、(9)社会学理論と象徴過程 J. C. マッキンニー、(10)社会学理論の形成化 H. M. バラロック、(11)比較社会学の分野における経験的社会調査の位置 P. F. ラザースフェルド、(12)規範秩序としての知識の集積 A. F. ブラム、(13)実践的行為のフォーマルな構造 H. ガーフィンケルと H. サックス、(14)複合社会における逸脱と秩序 J. K. ググラス、(15)社会心理学の変数との関係における社会学理論 A. インケルス、(16)クリオとミネルバ(歴史と社会) C. ティリー、(17)社会分析への補足的アプローチ J. J. スペングラ、(18)文化の社会学的意味 T. O. ベィデルマン
- (3) 構造社会学 (Structural sociology) は、ティリヤキアン [E. A. Tiryakian (J. C. McKinney and E. A. Tiryakian) 1970: p. 131] によると、社会的システム societal system のマクロな動態的な分析をめざす理論的アプローチであって、全体社会のファンダメンタルな実体や文化的な枠組を分析の出発点としている。また、I. ロッシーの編著『構造社会学』(1982)は、フランスの構造主義に対する、米国の社会学界のあり方を示すものである。
- (4) 井川一久・武田昭二郎著『カンボジア黙示録』

1981年、田畑書店。

筆者も現地に対談したことのある2人の特派員の現地踏査による報告。「カンボジアで現実に起きたことを直視し、徹底的に究明し考察する必要がある」との主張は、大きな示唆を与える。

- (5) 池田 昭著『ウェーバー宗教社会学の世界』1975年、第5章。
- (6) 木戸 蕨「現代社会主義のジレンマ」1982年11月29日、『朝日新聞(夕刊)』。  
伊東光晴「社会主義経済の悲劇性」『世界』1983年1月号。
- (7) 村上兵衛「現代日本を問直す」『中央公論』1983年1月号、p. 146~172。
- (8) 木田 元「社会学と現象学」『社会科学の方法』第8巻第3号(1975年3月)。
- (9) 矢野 暢『東南アジア世界の論理』昭和55年。青木保『沈黙の文化を訪ねて』昭和57年。
- (10) 福永安祥「中国の大学と社会学」、『めいせい』。1982年8月号。

# 参 考 文 献

1. R. Boudon, *The Crisis in Sociology*, 1980.
2. A. J. Blasi, *Toward an Interpretive Sociology*, 1978.
3. Randall Collins, *Sociology Since Mid-century*, 1981.
4. M. Douglas, *Essays in the Sociology of Perception*, 1982.
5. Hans-Dieter Evers, *Sociology of South East Asia*, 1980.
6. A. Giddens, *Sociology*, 1982.
7. C. Geertz, ① *The Religion of Java*, 1960. ② *Agricultural Involution*, 1963. ③ *The Social History of an Indonesian Town*, 1965. ④ *Islam Observed*, 1968. ⑤ *The Interpretation of Cultures*, 1973. ⑥ *Negara*, 1980. ⑦ *Meaning and Order in Moroccan Society*, 1979.
8. I. Rossi, *Structural Sociology*, 1982.
9. J. C. McKinney and E. A. Tiryakian (ed), *Theoretical Sociology*, 1970.
10. アジア・エートス研究会編『アジアの近代化における伝統的価値意識の研究』1978。

(ふくなが やすよし、本学科主任教授)